

サブウェイ

佐野 広実

第二話 誰の物ですか

一

「ほんとほさ、こう、なんていうか、ジョーカーみたいなやつを捕まえるっていうの、想像してたんだよね」

いつか原口由紀はらぐちゆきがそう言ったのを覚えている。

いざとなったらそんなことはできないと町村光江まちむらみつえが鼻で笑った。

もちろん、穂村明美ほむらあけみも、無茶な話だと思った。

地下鉄にかぎらず、列車内での殺傷事件が起きているのは事実だ。ちかごろはその数が多くなっている。

かつて地下鉄内で発生したサリン事件以降、警備体制の強化はおこなわれていた。その甲斐もあって、事件から三十年近くが過ぎていくが、しばらくは地下鉄内での大きな事件は起きていなかった。

しかし、ここへ来てJRや私鉄路線の車内で、走行中に刃物を使

用した殺傷事件が立て続けに発生した。カルト集団などの組織的な
犯行でなく、個人的な犯行だった。

突発的と言っている。

完全にそれを防ぐ方策はないだろう。防犯カメラは車内に設置さ
れ始めているが、犯行の防止にどれだけ有効か、明美には疑問だっ
た。

犯行をおこなった犯人たちの動機をニュースなどで見聞きすると、
走行中の電車は密室なので襲撃しゅうげきすれば逃げ場がない、だから選ん
だという話だった。たしかに走行する列車は外部と遮断しゃたんされる。運
行会社も、緊急停止はしても、乗客を車外に出すことはめったにな
い。地下鉄ならなおさらだ。

だからこそ、自分たちのような仕事についている者がいる。もし
凶悪事件が発生したなら、乗客はパニックになるだろう。そのとき、
落ち着いて避難誘導できる者が、その場にいるかどうかが大きな分
かれ道になるはずだ。犯人に立ち向かうのではなく、被害を最小に
抑えることこそが重要になる。

制服の警備員は事件の抑止。明美たちのような私服の警備員は突
発事態への初動対処。

役割分担としては、そう区分されている。

とはいえ、明美たち私服警備員はまだ正式な導入に向けた試験期

間だった。テスト生として採用された百五十人がそれなりの効果を示さなければ、そこで導入は白紙に戻る。

本来なら車内で事件が発生したとき、乗客同士で助け合うことが理想だが、そのときそこにどんな人がいあわせているのかは、わからない。よかれと思ってほかの乗客に指示を出しても、かえって事態を悪化させてしまうこともある。

だからこそ、一般乗客にまじって方が一の事態に備える警備員が必要というわけだ。

だが、だからといって事件に遭遇そうごうしたいとは思わない。乗客の安全を守るのが主たる任務なのであり、ましてや犯人を逮捕するのが任務ではない。だいいち逮捕権などありはしない。

そういう意味では地味な仕事と言っている。

私服で地下鉄に乗り込み、トラブルが起きそうな状況のときは、事前にそれを防ぐ。

研修のときに聞かされたのは、そういうことだった。

そもそもトラブルを引き起こしそうな客と、そうではない客を見分けることなどできはしない。一見していかつい男が乱暴を働くとはいいい切れない。大人しそうな女が意地悪かもしれない。それに、人は直面した状況によつては態度をがらりと変えることもある。

単純なようでいて、かなり慎重な判断を要求される仕事とも言え

た。

どちらかといえば、体力より人間観察が大事ということだろう。

明美は、ちかごろそう感じていた。

勤務開始から四カ月もすれば、この仕事の長所や短所が見えてくる。導入しようと言いつ出した幹部職員たちにしても、じっさいにやってみないとわからない部分もあったはずだ。

おせっかいなやつと思われた。注意したら逆に脅された。馴れ馴れしいといって嫌な顔をされた。

私服警備員からは、そういう報告も上がってきているという噂だった。

一般乗客にまじっているため、正体を知らない当の乗客から苦情は来ないが、対処方法に問題があったのは間違いないだろう。

おくのたかこ
奥野孝子が一週間の停職になったという話が飛び込んできたのは、そんなときだった。

二

「ぶっ叩いたんだってさ」

町村光江が太い腕を組んだ格好で、顔をしかめた。

「まじか」

原口由紀が水割りのグラスから飲もうとしかけて少し嘔き出したあと、口を拭きつつぶやいた。

いつも集まる「エルニーニョ」に駆けつけた町村光江が、詰所で聞き込んだ話を明美と由紀の前で話したのだ。

奥野孝子が乗客に平手打ちをくらわせた。しかも相手は女子高生だというのだ。

明美はわけがわからなかった。

いつも冷静で物静かな奥野のたたずまいが、乗客を平手打ちしたというイメージとあまりに食い違っていた。

「なにかの間違いじゃないんですか」

町村光江に尋ねると、首を振った。

「だったらいまごろここに来てるはずでしょうが」

たしかに、仕事終わりに毎度のように集まる四人のうち、奥野だけがきようはいない。

丸ノ内線池袋駅でのことだったという。

午後三時半過ぎに荻窪おぎくぼで人身事故があり、丸ノ内線全線が一時停止した。そのためちょうど池袋に停止していた列車で、事件は起きた。大半の乗客が文句のひとつも言いたい状況だ。だが、普通は心の中で舌打ちするだけにとどめる。

しかし、それを口にする者の中にはいる。

学校帰りのふたりの女子高生もそうだった。列車の遅延に対して文句を言っていたらしい。

すると、近くにいた奥野が、ひとりの生徒の腕を取ってホームに引っぱり出した。何度か言い合ったあと、奥野の平手が女子高生の頬を張った。

近くにいた通勤客が見咎めてあいだに割って入った。

むろん、周りの乗客は奥野が私服の警備員だとは気づいていない。平手打ちされた女子高生は訴えるのをめき、警察に通報した。駅員がふたりをなだめ、警察がやってきて事情聴取が事務室で行われ、そこでやっと奥野が単なる乗客でないと判明した。

それを聞いた女子高生は、さらに警備会社を訴えると言い出し、母親がやってくると、その母親までが訴えると言い、ともかくいったん引き取ってもらったらしい。

奥野はそのまま警官に連れられて渋谷の詰所まで回された。

待機していた統括官の三木が警察に應對し、奥野と三木が女子高生の家に詫びを入れに行くことで、話はまとまった。

ただし、あきらかに暴力行為であり、女子高生側が診断書を取ってやはり訴えると言い出せば、それを止めることはできない。

奥野が連行されなかったのは、三木が元生活安全課の刑事だったおかげと言っている。

「で、どうなったのよ」

水割りを飲むのも忘れて聞き入っていた原口が、町村に先をうながした。

「三木が本部と連絡取って、すぐに一週間の停職が決定ってこと。なんでも明日ふたりで菓子折り持って謝りに行くらしいよ」

原口がソファにもたれかかり、ため息をついた。

明美はそこまで聞いても、あの奥村が急にそんなことをするとは思えなかった。

「なぜ、平手打ちをしたんですか」

町村に尋ねると、首をかしげた。

「そのあたりはよくわかんないだね。こっちも乗り出して話を聞いてたわけじゃないからさ。帰り支度しながら、耳だけダンボにしてなんとか聞き取ったのよ」

つまみのソーセージにフォークを突き刺しながらこたえたが、ふと思いつ出したのか、ソーセージのついたフォークを明美の顔の前で振った。

「そういえばさ、前にも一度あったのよ」

「なにがですか」

「同じような件よ。十一月終わりだったかな」

明美は初耳だったが、原口由紀は知っていたらしく、ああ、あれ

かとおぶやき、町村に尋ねた。

「あのときは痴漢ちかんをぶちのめしたんだっけ」

「そう。あれはちよっとね」

「でも、あれくらいやらないと痴漢は駄目よ」

「あれくらいって」

明美がふたりを交互に見やると、町村がソーセージを齧かじり、原口が代わりにこたえた。

「ボコボコにしたんだってさ」

ボコボコだけでは程度がわからないが、原口のふだんの口ぶりからして、仕方がない。

町村がソーセージを呑み込んでから、また説明を始めた。

事件は朝の八時に都営新宿線で起きたという。

「勤務時間じゃないじゃないですか」

「そうなのよ。あの人、勤務につく前にも、個人的に朝はあちこちの路線に乗ってたみたいなの」

痴漢にかぎらず、トラブルが起きやすいのは朝の通勤ラッシュと夜の帰宅時刻以降だ。しかし、早番は九時から四時、遅番は十二時から八時と決まっていた。まだ試行期間だから、重要な時間帯に導入はされていない。

「使命感が強いのは悪くないけど、勤務時間外には職務権限ってな

いわけよね」

町村の言葉に、原口がうなづく。

「あんたの場合は逆。勤務時間内にもちやんと職務を遂行しないでさぼるって、どうなのよ」

「いまそれ関係ないし」

原口は平然とこたえ、煙草に火をつけた。

町村もそれ以上相手にせず、明美に顔を向けてきた。

「で、職務時間外だったのもまずいんだけど、見つけた痴漢の襟首えりくび纏んで顔を壁に叩きつけたっていうのよ」

けいおうはちおうじ けいおうはちおうじ もとやわた いわもとちやま
京王八王子から乗り入れてきた本八幡行きが、岩本町駅に到着する直前のことだった。すでにラッシュ時になっていて、車両はかなり混み合っていた。

奥野が気づいたのは、九段下駅を出たころだった。すぐ近くで、若い女性社員が身体を不自然に動かしている。背の低い、女子高生のような風貌のその女性は、よく見ると青ざめた顔をしていた。すぐ背後に小太りのサラリーマン風の男がこれまた不自然に密着している。混んではいたが、そこまで密着するほどではない。見たところ四十前後の男だった。

奥野はとっさに痴漢と見て取った。

だが、確実な状況を確認はしていない。神保町、小川町と小刻じんぼうちょう おがわまち

みに列車は停止し、乗客が乗り降りする。

痴漢はたいていドア付近にいる女性を狙う。ばれたときに駅でとっさに逃げられるようにしているのだ。車両の奥に入ったあたりで痴漢をして発覚すれば、周囲の客に取り押さえられる可能性は高い。そのときも、そうだった。

乗客の乗り降りにまぎれて、奥野は女性の横に移動した。ドアの隅に追い詰められていないのが幸いだった。

携帯の画面に「困っていますか」と表示し、女性にこっそりと見せた。

はっとしたように女性が奥野に視線を向け、小さくうなずいた。「痴漢ですか」と表示を変えると、また女性はうなずいた。

奥野は男の手が背後から女性のスカートの下に突っ込まれているのを目視した。

同時に奥野はふたりのあいだに割り込むようにして、男の手を掴んだ。

「次の駅で降りてください」

声をひそめて男に告げた。

「見てきたように話してるけど、それほんとか」

原口が茶々を入れた。町村はむっとして睨にらんだ。

「こういう話は臨場感が大事なんだって。でも、作ってないからね。

本部のお偉いさんが直接事情を訊いたとき、そう話したんだって」

地下鉄職員の夫がいる町村なら、どこからか伝手ついででそういった話を聞き込んでもおかしくはない。

先を話せとうながすように、原口はグラスを持ったまま手を振った。

ちょうど岩本町駅に、列車は滑り込んだ。

観念したのか、男は腕を取られたまま、素直に奥野に従った。が、ドアが開いたとたん、男は腕を振り払い、逃げ出した。

乗客にぶつかりながらホームを逃げる男を、奥野は追いかけた。

男はすぐに息が上がり、奥野の手がスーツの襟にかかった。ぐいと引つ張り、男は足を滑らせて尻餅しりもちをついた。男を立てせ、襟をつかんだまま引きずっていくと、思い切りその顔面を壁にぶち当てた。

そこでやっと駅員が駆けつけ、奥野を引き離した。

男は尻餅をついて捕まったときに「ごめんなさいごめんなさい」と何度も弱々しく口にしていたと話す目撃者と、ふてぶてしく笑っていたと話す目撃者がいて、そこは判然としない。

しかし、全治二週間の怪我だったことに変わりはなかった。

「たしかに痴漢したのは悪いですが、あそこまではちよつとやりすぎでしょう」

事務室で駅長が奥野にそう苦言を呈うわさしたという噂もある。

奥野はすぐに駅員に身分を明かしたから、「勇敢な一般客が痴漢を退治」とはならなかった。勤務時間外であったため、「一般客」には違いがないが、それで決着させるわけにはいかなかった。

「そのときも一週間の停職だったらしいよ」

町村はそう話を締めくくった。明美たち四人が仕事終わりに飲みだしたのは今年に入ってからだから、それ以前のことを明美が知らないのは当然だった。

奥野が暴力を振るうと知ったのも意外だったが、見境なく行使するはずもない。しかも、痴漢という犯罪をおこなった相手に対して過剰な暴力を振るったことと、今回の件は違う気がする。

単に言い争っただけの女子高生相手なのだ。

なにか事情があったのではないか。

明美はそんなことを思いつつ、その夜は面白いほど酔えなかった。

三

非番の一日があけて出勤したとき、渋谷詰所のメンバー出欠表の奥野孝子の欄に「停一」と赤字で書かれているのを見て、やはり町村の話は本当なのだと思った。

着任の点呼を終え、統括官の三木に事情を訊いてみようと思った

が、単なる詮索好きと思われるのが嫌で、訊きそびれたまま任務へ向かった。

きょうは半蔵門線、南北線、千代田線を中心に回るよう指示された。午前九時を回って、通勤ラッシュは落ち着き始めている。

列車に揺られながら、明美は一昨日聞いた奥野の話について、考えていた。非番だった昨日も、ジョギングで十キロ走り込みつつ、つい考えはそちらに向かっていたものだ。

本来なら緊張感をもって車内状況に気をつかわなくてはならないのだが、どうしても集中することができなかった。つい自分の境きょう遇ぐに引き寄せて、奥野の行為が浮かんできてしまう。

もし自分が恋人を殴り殺した相手をこの手で捕まえたら。

奥野のように見境なく殴り、殺すまで行ってしまっただろうか。

まだ二年しか経っていない。恋人の要一よういちが地下鉄構内で何者かに殴られ、その結果死んでしまった事件は、つい昨日のこのように明美の記憶に生々しく刻みつけられている。

要一が相手になにかしら恨まれるか、その場でトラブルを引き起こした可能性もある。痴漢行為ではないだろうが、要一に非のある何かがあったのかもしれない。

だとしたら、犯人を捕まえたとき、明美は犯人を殺すまで憎めるだろうか。

つらつらとそんなことが頭をめぐり、半蔵門線で北千住まで行き、そこから千代田線に乗り換え、霞ヶ関駅まで戻ってきたときだった。

「あら、忘れ物」

乗り込んできた三人の中年女性たちが明美の前の座席にっこうとしたとき、そのひとりが棚の上に目をやって声を上げた。

ちようど明美の真向いの棚に、紫色の大ぶりの風呂敷包みが載せられたままだった。あらためて見回すと、乗客はさほどおらず、座席にも空席が目立つ。

「誰のかしらね」

買い物にでも出かけるところなのか、着飾った三人が明美の方に目を向けてきた。

「ここにいた人、どうしましたか」

別のひとりが尋ねてきた。

明美はすばやく記憶をめぐらせた。

たしか湯島ゆしまで乗り込んできた老人がいた。七十過ぎで、頭は禿げていたように思う。グレーのベストを着けていた。

二重橋前駅にしじゅうばしで降りて行っただが、棚に荷物を置いたかどうかは、記憶にない。

その前は茶髪の大学生がおおまた大股を開いて座っていた。パンク風の恰好だった。西日暮里にしじつぼりから乗って、根津ねづで降りた。こちらも棚に荷物

を置いたかどうか、はっきりしない。

ふたりのうち、どちらかが忘れて行ったのか。

すでに列車は動き出している。つぎの国会議事堂前こっかいぎ じどうまえで忘れ物を下ろし、事務室から各駅に問い合わせをすれば、相手にすぐ戻せるかもしれない。

行先表示に目を走らせた。代々木上原よよぎ うえはら行きだった。このまま忘れ物を放っておいても乗り入れ線だとその先まで行ってしまおうが、その不安はない。

どのみち注意不足だった。

明美は立ち上がり、棚の上から荷物を下ろした。

「わたし、つぎの駅で降りるので、事務室に預けておきます」

「そうね、そうしてもらえれば」

最初に声をあげた女性が、明美に押しつけるような調子でこたえた。

国会議事堂前駅のホームに着くと、明美は列車を降り、荷物を抱えて事務室へ向かった。

地下鉄での落とし物、忘れ物はかなりの数にのぼる。年間で六十万以上だ。いちばん多いのは傘だという。地上では雨が降っていても、地下鉄に乗ってしまえばそれを忘れ、傘を手すりにかけたまま降りてしまう。携帯端末もかなりの数にのぼる。ポケットに入れ

ておいたものが知らぬ間に落ちてしまい、気づかないまま降りてしまふ。駅の事務室に手渡した忘れ物は、いままでにもかかなりの数があつた。

しかし、これほど大きな忘れ物は初めてだった。いったい何だろうか。

風呂敷の間から、木箱らしきものが見え、歩くたびにごつごつと音がする。木箱の中にかなり大きな品物が入っているらしい。

事務室に入っていくと、若い駅員が気づいて近寄ってきた。

「忘れ物です。千代田線の代々木上原行き三号車にありました」
場所の詳細を口にする、駅員が目を丸くした。

明美は身分証を呈示し、私服警備員だと告げた。

納得した駅員が書類を取り出した。明美が必要事項を書き込んでいる横で、風呂敷包みを解いて中身の確認を始めた。

短くうめくような声が駅員から起きて、明美は書類から目を上げた。箱の蓋を取り上げたまま、駅員が固まっている。

「どうかしましたか」

「見てください、これ」

薄気味悪そうにする駅員の視線が向けられた。

明美は近づいて、箱の中を覗いた。そこには素焼きの白い壺が入っていた。

骨壺こつぽなのは、一目瞭然いちもくりようぜんだった。

四

置き忘れた者が誰なのか、住所も氏名も記されているはずはない。壺の上には戒名かいみょうを記した短冊たんざくがあったが、戒名だけでは骨壺に入っているのが誰なのかもわからない。

しかし、物が物だから忘れていったことには気づくはずだ。ひとまず預かって、忘れ物集積所のある飯田橋駅いいたばしに持って行くと駅員は答えた。

明美もいったんはそう思ったが、もしわざと置いていったとしたら、名乗り出てくる者はいないのではないか。

最近は墓ほむを持っていない家があり、どこにも葬ほうむれないまま、持て余した結果、「忘れ物」という形で捨ててしまう遺族がいると聞いたことがある。

さすがにゴミ捨て場に放置するのは忍びなく、列車内やコインロッカーに置き去りにするわけだ。

もしそうであるなら、遺骨の引き取りに誰も現れないことになる。そもそも骨壺の中に入っているのは、人の骨である。かつて人だったのに、亡くなってしまったあとは「忘れ物」になってしまう。

しかもそれを捨ててしまう。

遺族には遺族の事情があるのかもしれないが、あまりにもやるせない話だ。

人の死がそこまで軽く見られるようになってしまった。

明美はそんなことを思いつつ、勤務を終えて詰所に戻った。

「遺骨か」

日報を提出すると、三木統括官は短くつぶやいた。

「すぐ名乗り出てくるだろうという話でした」

明美は自分の思いは口にせず、駅員の返答をそのままこたえた。

「きみは真正面に座っていたんだろう。誰が棚に載せたのか気づかなかったのか」

「すみません。不注意でした。座った乗客はふたりいましたが、どちらが置いたのかはつきりしません」

素直に頭を下げた。

三木は何か考え込みつつも、うなずいた。

「わかった。お疲れさまでした」

「穂村明美、業務終わります」

控室に向かおうとすると、三木が呼び止めた。

「ちよっといいかな」

デスクから離れ、部屋の隅にうながされた。

「さつき大崎署おおさきの担当者から連絡があつてね」

明美は身構えた。大崎署は恋人の要一が殺された事件を担当している所轄だった。

「なにかわかつたんでしようか」

急き込んで尋ねる明美に、三木はちらりと事務室に視線をやった。声をひそめると言いたげだった。

「いや、そういう話じゃない。きみにも直接連絡があるだろうが、上司にわたしがいると知っているから、ひと足先に連絡してきたんだ。じつは担当が代わって、新しい者が継続捜査につくという話だった。顔合わせのようなものだと思えばいい」

まったく期待外れだったが、つとめて落胆した様子を見せず、明美はうなずいた。

「そうでしたか。ありがとうございます」

いままで担当してくれていた刑事は、磯田いそだとかいった中年の男性だった。事件発生時に事情を訊かれたくらいで、その後何度か電話で連絡をくれたに過ぎない。いくつも事件を抱えているのはわかるが、捜査をしてきている印象はなかった。

自分で犯人を見つける。

そう明美が決心したのも、警察がほとんど動いていないとわかったからだ。地下鉄の私服警備員を志願したのは、そのためでもある。

「あさつてが非番だと伝えてある」

「わかりました。お手数かけました」

まだ何か言いたそうな顔つきだったが、そう言って明美は三木のもとを離れた。

その日帰ると、大崎署の中窪なかくぼという刑事から留守電が入っていた。名乗った後、今度継続捜査を担当すると告げていた。

その声が女性だったのが意外だった。

中窪由紀子。

どんな人物なのか、興味がわいた。

折り返し電話を入れると、あさつて署で会いたいと言われた。午後からならいいと答えると、二時にお待ちしていますとはきはきとした口調で言われ、通話を切った。

ベッドの枕元にある要一と一緒に写っている写真を手に取った。

学生時代の記憶がつぎつぎに甦ってくる。いつどんな会話を交わしたか、どんな笑顔を見せてくれたか、亡くなった直後はまだ生きているように息遣いまで感じ取れていた。まる二年が過ぎても記憶は薄らうすらうすらうすとしない。

もし、単に別れただけなら、そんなことはなかっただろう。事件に巻き込まれて亡くなったことが、記憶が薄らうすらうすらうすることを拒否してい

た。それはいまの明美を形作っているし、枷かせになつてもいる。
犯人をこの手で捕まえなくては、前に進めない。
つねに明美はそう感じていた。

その翌々日大崎署に出向いた。

受付で名乗ると、すぐに刑事課から中窪が姿を現した。

身長はさほど高くはないが、がっしりとした体格で、スーツを着込んでいた。

応接室に通され、名刺を交換する。

大崎署刑事課 巡査部長 中窪由紀子

三十を少し超えたくらいの年齢だろう。化粧は薄いのが、整った顔つきだ。ショートカットが表情を引き締めている。

「担当を引き継ぎました。よろしくお願いします」

向き合つて座つた中窪はそう言つて軽く頭を下げた。

「ご遺族は地方にいらっしゃるとのこと、都内に在住のご関係者のかたということに来ていただきました」

なるほどと納得した。とはいえ、捜査で新しい事実などが出てこないかぎり、関係者に連絡をしないのが普通だ。それだけやる気に満ちているのかもしれない。

「正直にお話ししておきますが、わたしは刑事課に配属されてまだ

半年です。継続捜査をいくつか任されたのですが、事件当時の状況を把握しておきたいと思い、来ていただきました」

「どういうことでしょうか」

「個人的にということなのですが、継続捜査をする場合、捜査資料のみを見てもわからない部分が出てきたりするので、そういった点を確認したいと思ひまして」

「ということは、きちんと捜査しようとしているらしい。明美にしてみれば、歓迎すべき話だ。刑事課に配属されて半年というのが危うい気もしたが、それだけやる気があるとも受け取れる。」

明美は事件の経緯を丁寧に説明していった。中窪はそれを聞きつつ、資料に目を通していく。

ひととおり説明を終えると、中窪は礼を口にし、今後捜査に進展があれば明美に連絡すると告げた。

「穂村さんの方でも、何か思い出したら連絡をいただけると助かります」

「そう言って送り出された。」

大崎駅へ向かいながら、ふと思った。

自分の知らない要一がいたのだろうか。

二年前にも頭をかすめたことはあったが、ふたたびその思いが起こった。四六時中一緒にいたわけではない。互いにひとりの時間は

尊重していた。むろん、浮気など疑ったこともない。信頼していた。しかし、なにか隠し事をしていて、それが事件のきっかけになっていたとしたら、中窪はそれをほじくり返そうとしているとも言えた。そこから犯人につながる手がかりが出てくる可能性はたしかにある。

いまの明美にとって、それは迷惑なことのようにも思われる。仕事に集中できなくなる原因にもなりかねない。同時に、要一の記憶を汚されることにもなる。

多少不愉快な気分のまま、駅にたどり着く。

このまま帰ると、どっと落ち込みそうだった。

どこかで気晴らしでもしたいと考え、ふと、奥野孝子のマンションに行ってみようかという気になった。

停職の事情を聞いたかったし、自分の身の上を話してもいいと思った。三日に一度は酒を飲む仲間にもかかわらず、互いの身の上を深く話したことはない。

携帯のメモリーに入っている奥野の番号にかけてみた。行ったこととはなかったが、五反田が最寄りの駅だごたんだということは知っていた。

呼び出し音は鳴らず、「電波が届かないところにいるか、電源が切られています」と案内が伝えてくる。

しばらく考えて、町村にかけ直した。

「どうかした」

ぞんざいな声がすぐに返ってくる。背後でテレビのドラマが流れているのがわかった。

「奥野さんの住所、知りませんか」

しばし間があった。

「なんで」

「いえ、なんとなく」

「行くつもりなの」

「非番だし」

また、間があく。

「行ってどうするのよ」

「どうって」

「行ってもどうにもならないでしょうに」

「まあ、そうなんですが」

「好きにすればいいけどさ」

町村は投げやりになりつつも、住所を教えてくれた。メモして、通話を切った。

携帯をしまい、五反田まで山手線で向かった。

繁華街と反対側の橋を渡ったあたりに、マンションはあった。

五階にエレベーターで上がり、ドアの前に立つ。インターフォンを

鳴らしても、返答がなかった。

外出しているのかもしれない。無駄足むだあしだった。

エレベータへ引き返そうとすると、買い物袋を下げた女が、小さな子どもの手を取って歩いてきた。すれ違って様子をうかがっていると、奥野の隣の部屋のドアを開けようとしている。

「すみません。奥野さんはいらっしやらないんですか」

急に声をかけられた母親は、ドアを開けて子どもを先に部屋に入れてから、明美に向き合った。

仕事の同僚だと告げると、母親の顔から不審げな色は消えた。

「田舎に一週間ほど行くって、言っていましたけど」

「田舎ですか」

「ええ。家族のお墓参りでもしてくるって」

「どちらなんでしょうか」

「宮城とか聞きましたよ。津波でみなさん亡くなったとか」

明美は一礼してその場を立ち去った。

奥野が宮城の出身だということも、家族を津波で亡くしたということも知らなかった。本人が話したいと思っていないことを無理に聞き出したような嫌な気分になった。

もしかすると、大手企業で秘書課に勤めていた奥野がそこを辞めて地下鉄の警備をしている事情のひとつかもしれない。

もしかすると、自分には何も見えていないのかもしれない。奥野のことも要一のこと。

結局その日は夕方にも十キロのジョギングをして、頭からもろもろの戸惑いを振り払った。

五

「きょうはわたしに同行してもらおう」

翌朝出勤し、点呼を取るために三木の前に立つと、明美はそう命じられた。

「ですが、勤務は」

「本部に言って勤務扱いにしてもらうことになっている」

いままで、そんなことはなかったから、問うつもりで三木の顔をまじまじと見た。

「きみが届けた忘れ物の件だ」

最小限のことを三木はこたえ、立ち上がって一緒に来るようにとうながした。

渋谷の詰所を出ると、半蔵門線に乗り込み、そのまま九段下まで行った。九時を過ぎても、まだかなりの混みようだった。

いまは明美の上司である三木だが、亡くなった父親の友人でもあ

った。とはいえ公私の別はわきまえている。目下は上司として接する状況だが、それがかえって気づまりになる。

「なにか問題でもあったのでしょうか」

思い切って尋ねると、飯田橋に着いてから説明するだけで三木はこたえた。

ふと、奥野のことを訊くいい機会かもしれないと思った。

「まったく別の話なんですが、お聞きしてもいいでしょうか」

並んで吊革につかまったまま、三木に顔を向けた。

「なんだね」

「奥野さんのことです」

そう前置きして、奥野と女子高生とのいきさつを知りたいと告げた。

「同僚ですし、わたしも信頼していたので、そんなことをするのが信じられないんです」

周囲の乗客の耳を気にして、言葉が抽象的になる。

黙って聞いていた三木は、視線を向けずに声を低めた。

「個人的な話だから口外しないでほしいが、理解してくれている者がいた方がいいと思う」

そう前置きし、三木は話し出した。

「彼女の家族は津波で全員亡くなっている」

「はい」

知っているというつもりで返事をした。三木がちらりと目を向けてきた。そこまでの話をしている間柄だと受け取ったのだろう。

美樹の説明によれば、奥野はもともと厳格な両親と折り合いがよくなかったらしい。地元である宮城の大学に行けという両親に逆らって東京の大学に入り、奨学金とバイトをして、仕送りはもらっていなかった。その後大手企業に就職し、ほとんど絶縁していたという。

そこに起きたのが、東日本大震災だった。テレビで中継される津波の状況を見た奥野は、愕然がくぜんとした。こんなことになるなら、両親との関係を修復しておくべきだった。

「それまでの自分を振り返って、人の命を軽視するような物言いが、そのときから我慢できなくなったんだろう。それがきっかけで、勤めていた企業も辞めた」

「そうだったんですか」

「奥野くんが問題を起こしたとき、荻窪で人身事故があった。ホームドアを乗り越えて列車に飛び込んだ」

それは知っていた。勤務中に無線で事故や事件については逐一指令室から連絡が入る。

「あとでわかったが、生活が苦しく鬱うつぎみだった若い女性だった」

遺書がホームのベンチに置かれていたという。

「奥野くんの乗っていた列車は池袋で停車していた。たまたま近くにいた女子高生のひとりが、周囲に聞こえるほどの声で不満を漏らした。それを聞いて、奥野くんはその女子高生の腕を取ってホームに連れ出した」

「女子高生はなんて言ったんですか」

ひと息の間があった。

「人に迷惑かけて死ぬんじゃないよ」

たとえ思ったとしても、口にすべき言葉ではない。奥野もそう思った意味を込めて諫めたらしい。

「注意されて自分の言葉のひどさに気づいたなら、奥野くんも平手打ちまではしなかっただろう。しかし、相手は口ごたえした。女子高生本人も、その点は認めている」

「何と言ったんですか」

またひと息間があった。

「負け組のクズがひとり死んだだけじゃないか」

奥野が家族を理不尽な形で失っていなかったとしても、平手打ちのひとつくらい食らわしてやって当然だと思った。その場で対応したのが明美だとしても、じっさいに手を出すかどうかはともかく、それくらいのは憤りは覚えただろう。

女子高生を引き取りに来た母親も悪びれた様子を見せず「人生は勝ちか負けですからね」などと口にしたらしい。何をもって勝ち負けなのか知らないが、勝っていれば何を言ってもいいというわけではないだろう。

痴漢の一件といい、人を人とも思わないようなあしらいをする者に対し、奥野が暴力に訴えてでも対抗しようとしている思いは、痛いほどにわかった。空手三段の奥野であれば、通常なら暴力をふるうのを思いとどまるだろう。しかし、思いとどまるよりも怒りが勝ってしまうのに違いない。

「ともかく被害届を出さないようにしてもらったが、勤務中の件だからな。停職ということになった」

それ以上のことを三木は口にしなかった。九段下で東西線に乗り換えたあと、飯田橋駅に到着するまでは互いに黙りこくってしまった。

飯田橋駅で列車を降り、連絡通路を南北線へと向かう。事務室の前を行き過ぎ、目黒^{めくろ}方面の改札まで進む。

改札近くの表示に従い、忘れ物相談所の前にたどり着くと、ドアを開けて入っていく。受付で名乗るとすぐさま奥に通された。

「お待ちしていました」

事務室内の応接スペースに待機していた男が立ち上がって一礼し

た。中年の眼鏡をかけた制服姿の男で、忘れ物相談所担当主任の駒田こまと名乗った。

挨拶を済ませ、その駒田と向き合い、明美は三木と並んで腰を下ろした。

「ひとつテストしようか。地下鉄内の落とし物について研修を受けたはずだが、覚えているかな」

三木が尋ね、駒田もちょっと興味ありげに視線を向けてきた。明美は基本的な点を口にした。

「忘れ物や落とし物については、大きくふたつに分けています。ひとつは、傘やハンカチ、ペン、花束など、よくある落とし物で、なおかつ所有者が特定しにくい物。もうひとつは、めったにないような品物で、名前など所有者が特定しやすいか、はっきりしている物です。各駅に届けられた品物は、当日は駅に保管しますが、それ以後四日間はここ、飯田橋の落とし物相談所に保管されます。それまでに名乗り出る乗客がいなかった場合、警視庁の落とし物センターに移送され、そこで三か月保管されます」

警視庁の保管センターも、飯田橋駅のすぐ近くにあった。

「お見事です。私服警備のかたにお会いするのは、たぶん初めてですが、研修ではそんなことも覚えるんですね」

駒田が感心したように微笑んだ。「たぶん初めて」というのは、

私服だから警備員かどうかわからないまま、単なる乗客として接していたことがあったかもしれないということだ。

「つまり、きみが届け出た忘れ物は、今日まではここにある。しかし、明日には警視庁に移る」

三木が念を押すように言った。明美はうなずいた。

「その品物は、所有者が確認できる物だったかな」

「いいえ。ですが、めったにない品物です」

「半年で四件あるというのは、めったにない品物と言えるかな」

「四件、ですか」

三木に問われて意味がわからず、訊き返していた。すると、向かいから駒田が苦笑気味に口を開いた。

「この半年で、地下鉄内の忘れ物として遺骨が三つ、忘れ物として届けられています。あなたの見つけた物を入れて四件」

「めったにないというのはわたしは思い違いだったんですね」

駒田が片手を振った。

「いや、思い違いじゃありません。たしかにめったにない忘れ物なんですよ。十年に一度あるかないか。それがこのところ立て続けにあったわけです」

最初は今年一月に護国寺駅ごこくじに届けられた。有楽町線ゆうらくちんせんの新木場行しんきばき車両の棚にあったという。どこから乗った客が忘れたのかわから

なかった。

二件目は三月の終わり。しろかねたかなわ白金高輪駅に届けられた。都営三田線みや日吉行きひよしの車両で見つかった。

三件目が五月の半ばに新宿線浜町駅はまちょうに届けられた。本八幡行きもじやわたの車両で、やはり柵の上にあったという。

「そしてあなたが見つけたのが四つ目というわけです。こう連続して遺骨が忘れ物になるというのは、おかしいと思いませんか」

たしかに異様かもしれない。墓がなくて持て余した者が、そう立て続けにいるとは思えなかった。

「これまでの三つは、持ち主は現れたんでしょうか」

思いついて尋ねると、駒田が三木に目配せした。

「三件とも、名乗り出た者がいる。特に問題なく引き取っていった」

三木の言葉を受けて、駒田が言葉をついだ。

「ふつうは、名乗り出ますね」

駒田の話では、それ以前の記録でも持ち主が名乗り出てこなかったのは一件だけだったという。

「たいてい高齢の夫婦のどちらかが亡くなって、葬儀を終えたあと、近くに墓を買うだけの資金もないまま、どうしていいかわからなくなって地下鉄に放置してしまう。ですが、すぐに思い直すようです。遺骨になってしまったとはいえ、長年連れ添った相手ですからね。」

受け取りに来たときには、自分のしでかしたことを反省して、なかには泣き出すかたもいます」

「しかし、今回の三件は意図的に地下鉄に放置したわけじゃない。うっかり忘れたというんだ」

三木が明美に顔を向けてつぶけた。

「人には事情がある。やむにやまれず地下鉄に置き去りにすると決断して、いったんはそうする。しかし、思い直して名乗り出ると。そういう状況に追い込まれた人が同じ時期に何人もいるというのは、わからなくはない。だが、三人が三人ともうっかり忘れたというのは、なにかしら不自然な気がするんだが」

これが傘や携帯といったものなら、話は逆だ。うっかり忘れたという理由の方が納得がいくかもしれない。しかし連れ合いの遺骨いこつである。大事に家まで持ち帰り、墓に収めてやらなくてはと考えているはずだ。そんなものをうっかり忘れる方が納得しにくい。

三木の言いたいことは、そういうことらしい。なにかしら疑念を抱いているようだ。

「いままでの三件は、一般乗客が柵にあるのを発見して届けてくれている。当然ながら、誰が置いていったのか目撃者がいたわけではない。今回はたまたまきみが柵に置いた可能性のある人物を覚えていた。そこで、これから受け取りに来る人物を確認してほしい」

ここに同行させたのは、そのためだと理解した。

「ですが、それを確認してどうするのですか」

「棚に置いた人物と同じ人物が引き取りに来るのかどうか、それを確かめたい」

そんなことに何の意味があるのか。

尋ねなかったとき、受付から声がかかった。

駒田が立ち上がって出て行き、すぐに戻ってきた。

「来ました」

短く告げて、そのまま保管庫へ向かっていく。

「あらかじめ、遺骨を忘れたという申し出があったら、受け取りの日時を指定してほしいと頼んであった。そして、昨日遺骨を忘れたという電話があった」

三木が立ち上がりつつ、そう言った。忘れ物を取りに来る日時は客しだいでも何でもなる。だが、こちらがわざわざ日時を指定したというのだ。明美は促されて立ち、受付のカウンターが見えるところまで三木とともに行った。

カウンターには開襟かいきんシャツ姿の老人が立っていた。ループタイが目立つ。白髪をびっちり固めて七三に分けている。

「どうだ」

三木の問いに、明美は記憶を呼び戻す。

いや、呼び戻すまでもない。棚に遺骨を置いた可能性があるのはふたりだった。ひとりは茶髪の若い男。もうひとりは禿げ頭の老人。いま目になっている老人はどちらでもない。

「あの人じゃありません」

横で三木が重々しくうなずいたのがわかった。

駒田が保管室から紫の風呂敷に包まれた遺骨を抱えて出てくると、カウンターにそれを置いた。

老人は頭を掻きながら謝っている。それから必要な書類にサインをし、遺骨を受け取って相談所を出て行く。

「よし、行こう」

「え」

「尾行するんだ」

当然のごとく三木が告げた。

六

老人は大江戸線おおえどの改札へ向かって行く。

いったい何を自分はしているのか。

並んで尾行している三木に聞きたかったが、いまは説明をしても
らえる状況ではなさそうだった。その横顔には厳しい気配があった。

おそらく防犯課時代の三木は、いつもそんな顔をしていたに違いない。

改札を入り、老人はそのまま、やってきた列車に乗り込んだ。

明美たちはひとつ隣のドアから乗り込み、ドア脇に立つ。老人は風呂敷包みを抱え、空いた席に腰を下ろしている。尾行されていることにはまるで気づいていないようだ。

蔵前駅くらまえに到着すると、老人はすっと立ち上がって列車を降りた。

風呂敷包みを片手で抱えたまま、老人がポケットから紙片を取り出すのが見えた。それにしばし目を落としてから、駅の表示に視線を移す。行先を確かめたようだ。このあたりの住人ではないのかもしれない。

地上に上がると、江戸通りに沿って進んでいく。

まだ昼前だが、ちらほらと人通りもある。しばらく行くと、左手に折れ、そこにある公園に老人は入っていった。蔵前公園というらしい。

こども連れの母親たちが集まっているのが見える。その横を通過して、老人はベンチに腰を下ろした。腕時計に目をやって、それからあたりに視線を向ける。

「誰かを待っているようですね」

公園の外から植え込みをすかして監視しつつ、明美はつぶやいた。

「少し離れよう」

三木の指示で、配送トラックの陰に隠れた。ちよつと立ち話をしているような素振りをする。

五分も経たずに、ひとりの男が反対側にある公園の入り口から姿を現した。黒のスウェットの上下、サンダルをこするように歩き、両手はポケットに入れている。二十代だろう。ぼさぼさの髪の毛は寝起きらしい。警戒をしている様子はない。

老人を見つけると、片手を上げてみせた。老人もそれに応じて片手を上げる。

近づいた男は無造作に老人の横に座ると、ポケットから何枚かの紙幣を取り出し、老人に渡した。枚数を確かめた老人が、抱えていた風呂敷包みを男に渡す。

男は風呂敷包みの結び目を持って立つと、ぶらぶらとさせながら来た方角に戻っていく。

老人も腰を上げ、浅草線の蔵前駅の方角へ戻っていく。

「きみは老人を尾行してくれ。わたしは男を」

命じると、三木は返事を待たずに男の後を追って行ってしまった。明美は言われた通りに老人の尾行をつづけた。

老人は、今度は都営浅草線に乗り込み、人形町にんぎょうちょうで降りた。

玩具店に入り、そこでこども向けのブロックのおもちゃを買うと、

横道に折れた。庭つきの家の門を開け、玄関のところで「ただいま」と言っただけで消えた。

「ここが老人の住居なのだろう。」

縁側のある家で、そのガラス窓の向こうに、老人が五歳くらいの子供にも先ほど買ったおもちゃを手渡しているのが見えた。子供もは飛び跳ねて喜んでいる。妻らしき老婆もその横で微笑んでいた。いったい何が起きているのか。

飯田橋で遺骨を受け取った老人を尾行してからの一連の出来事を振り返っても、わけがわからない。老人の妻は健在のようだ。となると、あの遺骨は誰のものだろうか。

門にはめ込まれている表札によれば、老人は竹中清たけなかきよしというらしい。

明美は腹をくくり、その門を開け、玄関でインターフォンを鳴らした。

返事とともに竹中清が玄関のドアを開いた。明美は身分証を提示し、すぐ本題に入った。

「地下鉄で勤務している者ですが、ちょっとお話をお聞きしたいんです」

「はあ」

竹中は不思議そうな顔でうなずいた。

「さきほど飯田橋で忘れ物をお引き取りになりましたね」

なんだそんなことかと言いたげに、竹中の相好そうこうが崩れた。

「ええ。まあバイトといったところですよ」

「バイトですか」

少し目を足元にうろつかせたあと、竹中は片手で頭の後ろをはたいた。自分のやったことがまずいことだったらしいと気づいたようだ。

「弱ったな。代理で受け取りに行ったんですがね。何かに違反でもしたんでしょうか」

「忘れ物ですから。忘れた本人でないと」

「ああ、そうですね」

「誰かに頼まれたんでしょうか」

「ええと」

「ご説明いただけますか」

そこへ奥から駆けてきた小さな姿が現れた。

「じいじい」

たどたどしい口調の呼びかけに、竹中はあわててかがみ、こどもの頭を撫でた。

「いい子にしているな。すぐ行くから、な」

こどもは素直にうなずいて、ちらりと明美に視線を走らせると、

また奥に駆け戻っていった。

「外でいいですか」

竹中は玄関のドアの外に出てくれとうながした。話が聞けるのであればどこでもいい。明美はドアの外で竹中と向き合った。

「単発のバイトでしてね。携帯の求人サイトで見つけまして。忘れ物をした本人の代わりに受け取りに行くだけの簡単なものと言われる」

「とすると、あの遺骨は竹中さんとはまったく無関係のものということですね」

「はい。申し訳ありません」

「遺骨を渡した先ほどの相手と面識はあったんですか」

あきれたような目が明美にあてられた。見られていたことが意外だったのだろう。

「あの人は初めてです。サイトで連絡されて、その通りにやっただけでして。ほかに誰にも会っていません」

「そうですか」

「あの、逮捕されるんですか」

「わたしは地下鉄の職員にすぎません。もしかすると警察から事情を訊かれるかもしれませんが」

「受け取った報酬も返さないとなりませんかね」

明美には、そこまでの判断はできなかった。

あらためて連絡をするかもしれないとだけ告げ、辞した。

少し歩いて竹中の家から離れた場所に来ると、携帯を取り出して

三木にかける。

「老人の家を特定しました。名前は竹中といいます。竹中清」

ざっと事情を説明する。

「了解した。今日の勤務は終了していい。それから、この件はまだ誰にも言わないように」

そこで通話が切れた。三木の方はまだ尾行が続いているらしいかった。

なにかしら深刻な事態が起きているらしい。

そう感じつつ、明美は人形町駅に引き返し始めた。

七

事情がわかったのは、五日後だった。

遅番で昼の十二時に出所した明美に、三木が伝えてくれたのだ。

警視庁が麻薬売買の容疑で七人の男を逮捕したという。

「きみのおかげだ」

そう言われても、ぴんとこなかった。

三木が説明してくれたところによると、半年ほど前から都内に出回る覚醒剤かくせいざいの量が増えていたらしい。新しいバイヤーが参入した気配があった。だが、流通ルートがはっきりしない。取引の現場を押さえられない。

そんな話を耳にしていた三木が、地下鉄で遺骨の忘れ物が多いことに気づいた。もしかすると骨壺に入れた覚醒剤を忘れ物という形で届け出て、忘れ物相談所を仲介にして取引をしているのではないか。

元刑事の直感が、そう思わせた。

骨壺に入っているのは遺骨に違いないし、蓋が針金で開かないようにしっかり止められてもいる。わざわざそれを開けて中身を確認することはしないし、するべきではない。

その先入観を利用しているのではないかと考えたのだ。

しかも、置き忘れたという人物と受け取りに来た人物が同一人物かどうか、確認する機会がなかった。もし、別人なら覚醒剤の取引に利用されている可能性は高い。

私服警備員がいるとは気づきもせず、柵に遺骨を置いた結果、それが確認できたということだった。禿げの老人が柵に置いたのではなく、茶髪の若い男の方が置いたのも、はっきりした。

三木が尾行した男は、骨壺を持って近くにあったマンションに入

っていったという。周辺住民によれば、その部屋には若い男が何人もひっきりなしに出入りしており、得体が知れないと思われていた。卸から渡った覚醒剤をパケに分け、売りさばく拠点のようだった。

三木はそこまでたしかめて警視庁の知り合いに通報をし、警察が踏み込んだ。その結果、芋づる式で覚醒剤を製造していた房総ぼうそうのグループと卸おろしの組織も摘発できたという。

老人たちは、ようするにその組織の「運び屋」だったことになる。単に小遣い稼ぎのために雇われただけで、受け取った骨壺を指示された場所で渡せば、金がもらえるとと言う仕組みだったらしい。

誰もが「簡単なアルバイト・高齢者限定」という携帯の求人で見られていた。別の高齢者が忘れ物をしたが、飯田橋まで行くだけの体力がない、そこで代わりに本人になりきって荷物を受け取ってきてほしいと指示された。

周到にも、老人たちを使うのは一回限り。忘れ物を受け取りに同じ人物が飯田橋の落とし物相談所に顔を見せるのはまずい。報酬は五万。悪くはない。自分の自由になる金が入る、孫におもちゃを買ってやれるなどという動機から引き受けていたという。

主犯七人とは別に、「運び屋」として利用されていた高齢者は五十五人。つまりいままでも少なくとも五十五回は覚醒剤の取引に地下鉄の忘れ物が利用されたことになる。高齢者たちは警察でそれぞれ

事情を訊かれており、そのうち二十六人は女性だった。

つまり、覚醒剤は骨壺の中に入れられていただけではなかったのだ。忘れ物のぬいぐるみ、ダウンジャケット、枕など、詰め物がなされている品物が多数利用されていたことがわかった。最初は、そういう様々な品物が利用されていたのだが、一気に大量の覚醒剤を運び、なおかつ内容が発覚しにくいものとして骨壺に行きついたようだ。

この事態を受け、地下鉄だけでなく、鉄道各線はこの一件で忘れ物の点検と見直しをせざるを得なかった。爆発物がまぎれている可能性から、X線検査はおこなっていたが、これからは麻薬犬の採用も検討すべきだという意見もあるらしい。

「老人たちは無罪というわけにはいかないだろうが、当人が覚醒剤を取り扱ったわけじゃないし、騙されて利用されただけだから、起訴はされないだろう」

それが三木の見立てだった。

「^{とほ}乏しい年金暮らしでは、孫にお菓子のひとつも買ってやれない。自分にもできる手軽なバイトだと考えたんだろう」

高齢者を利用し、使い捨てにしたのだと明美は思った。

「ともかく、そういうことだ。きみには力を貸してもらった。わたしからもお礼を言わせてもらおう」

「そんな。ただ仕事をしたまですから」

明美はそう答え、点呼ののち、その日の勤務に就いた。

説明を聞いているあいだは自分とは別世界の話のように思っていたが、犯罪摘発のきっかけのひとつを自分が作ったらしいのはたしかだった。

「ジョーカーのようなやつを捕まえない」と原口由紀が口にしたのを思い出した。じつさいにそんなことはめつたに起こらないと漠然ぼくぜんと考えていたが、もしかすると気づかないだけで身近にそういった世界とのつながりというのが、あるのかもしれない。

地下鉄にかぎらず、交通機関はまったく無関係の者たちが、たまたま乗り合わせる。そこには、乗客ひとりひとりの世界がある。見えているようで見えていない世界がいくつもあるのだ。もちろん、それらがすべて犯罪につながっているとはかぎらない。いや、犯罪につながっているものの方が少ないはずだ。

しかし、見知らぬ人と人がすれ違う時、なにかのきっかけがあれば、それがいいものか悪いものかは別にして、つながりができる。

それが人間関係なのだという、当たり前のこと気づいた。

ぼんやりとそんなことを考えつつ事務室を出ようとしたとき、不意に肩を叩かれた。

振り返ると、そこに立っていたのは奥野孝子だった。ちょうどロ

ツカールームから出てきたところらしかった。

「あ、おかえりなさい」

つい口をついて出ていた。宮城に戻っていたことを本人から聞いたわけではなかった。

「ごめんね。みんなに迷惑かけちゃったわ」

今日から仕事に復帰するという。一見すると、以前と変わりはないようだった。大手企業の秘書然とした服装も、落ち着いた表情と身ごなしも、変わってはいなかった。

「今夜は復帰祝いですね」

明美が言うと、奥野は微笑み、肩からかけていたバッグに手を入れ、小さな包みを取り出した。

「これ、おみやげ。ずんだもち。宮城の実家に帰っていたの」

「そうなんですか」

答えつつ、包みを受け取った。深く訊くのは、はばかられた。

「それじゃ今夜エルニーニョで」

「はい」

頭を下げて点呼に向かう奥野を見送り、明美は事務室を出た。

理不尽な形で家族を失った奥野は、人を人とも思わない相手に怒りを向ける。人の死を軽くあしらう者に我慢ができない。それをいけないことだとは、明美には断定できない。

ここにも、見えているように見えていない世界があった。

くっくく